

第8回「泉大津市オリウム随筆賞」

【佳作】

フリースクールにて、渾身の一品

大穂かづみ・福岡県

私は、三十六才で、高齢出産後、しばらくして、難病を発症した。そのため、腎不全となり、治療で週三日は、病院漬け。

普通には働けない。受験生の息子は、私大文系志望。高額な学費の支払いの少しでも足しにしようと、仕事を探した。

見つけた仕事は、週一回、一時間でも良いと言う、フリースクール講師。美術、図工担当だ。昔、ちよつとだけ、教員をしていた。

そのスクールは、主にLDという発達障害を持つ子ども達のための場所だ。LDとは、文字や数字を書くことや、計算することが苦手、という特徴を持つ子ども達のこと、知能には、問題ない子が多い。しかし、発達障害の他の特徴、ADHD（注意欠如、多動性障害）また、自閉症スペクトラムなどの、別の複数の特徴を、少しずつ持ち合わせている子ども多い。

ここは、小学生から高校生までの男子女子合わせて十人以下の小さなスクールだ。

ここでの授業は、熾烈、強烈、生半可ではやって行けないものだった。

彼らは、自分に正直に生きている。ホンネとタテマエという観念はない。ホンネのみで生きている。

だから、授業を受ける時も、面白いものは、楽しいものは、乗って来る。しかし、面白くないもの、楽しくないものは、そっぽを向く。それどころか、つまらない授業だと、床に寝てしまうのだ。もつと極端な子は、ゴティネイに、押入れから、枕とかけ布団を持って来て、

それを床にセットして寝てしまうのだ。授業が終わるまで。彼らは、嫌みでやっているのではない。自分が、そうしたいから、しているだけなのだ。

最初はびっくりしたが、逆に闘志が湧いて来た。

様々な授業を試みたが、成功もあり、失敗もあった。

皆が、がつつり食いついて来たのは、手仕事の授業だ。中でも、「編む」ことで、身につける作品が、自分で作り出せる授業だ。

最初は、ミサンガ作り。刺繍糸で作る。編み方は、一番わかり易い平結びを選んだ。編み方を習得するには、細い刺繍糸では、わかりづらい。そこで、綿コードを何本か使って、ゆっくり見本を示した。子ども達も、まずは、綿コードで平結びの習得をした。その後、刺繍糸で編むことに挑戦して行った。

子ども達の編む能力は、様々で、早い子はものの二十分ほどで、一本を仕上げた。

「先生、できたよ。」と、うでに結んで、うれしそうに見せてくれる。それを見た他の子たちも、それが刺激となって、増々、集中して作業に没頭する。中には、なかなか、編む順番が覚えられず、手が止まる子がいたが、こちらが少しずつ手助けすると、ひるまず、編み続けることが出来た。

この頃の授業は、一時限分が、二時間になっていた。しかし、誰一人、脱落することなく、少なくとも、一人一本は、作り上げることが出来た。

思えば、授業のはじめ、「ミサンガを作るよ。」と伝えた時は、「先生、そんなの、百均で買えるやん。」と言ってくる子もいた。

しかし、いざ作り上げると、愛着が湧いたのか、家でも、ずっと着けていたそうだ。後日、その子のお母さんが、「これまで、何一つ、興味を持つものが無かったが、このミサンガは、とつても気に入ったようで、ずっと着けている。」と喜んでおられたそうだ。

細い糸でできた小さなモノでも、自分の力で作り上げたものは、どれだけ良きモノになるのかを、身をもって経験できたようだ。

もう一つは、指編みで作る小さなマフラーだ。五本の指に太糸の毛糸を通して、そこに一定の簡単な編み方で、編み続けて行く。太い毛糸で編むので、さくさく編める。ものの一時間で、それなりのマフラーが出来るので、ちょっと自信がついたようだ。

次は、手の代わりに、手作りの編み機を使って、帽子を編む授業だ。編み機といっても、工作用紙に凸凹をつけて王冠のように輪にした簡単なものだ。その編み機の凸凹のツメに毛糸を引っかけ、あとは、指編みのように輪にした簡単なものだ。その編み機の凸凹のツメに毛糸を引っかけ、あとは、指編みの要領で、ハラマキほどの長さにして、上をギュッと絞ると帽子になる。皆、好きな毛糸で、せっせと編み続けた。出来上りにバラツキはあったが、皆、ちゃんとかぶれる帽子が出来た。

次に、その編み機を一回り小さくして編む輪編みのマフラー作りだ。輪に編んで行くので、形くずれなく、編み続けられるので、長くて、暖かいマフラーになった。

校長先生に、「素敵ね。」と、ほめられ、帽子もマフラーも、校長先生にプレゼントした子もいた。各々、自分で使ったり、家族へのクリスマスプレゼントにしたり、うれしい輪が、ずいぶん広がる時間になった。―編む、は心を豊かにしてくれる魔法のわざだ。